明智光秀

信原克哉

はじめに

私が明智光秀に興味を覚えたのはたしか高校生のとき、新聞に載っていた彼の人物論を偶々読んだことに始まる。それまで、光秀といえば主殺しの大悪人としか思っていなかったので、福知山に彼を祀った神社のあることや、信長を殺したのはいわば母の仇討などという伝説を知って、意外な感じを抱いたものであった。

「夕顔棚のこなたより、あらわれいでたるデデン、武智光秀えー」いわゆる絵本大功記十段目―。ここでは光秀は大変な悪玉である。尼崎の閉居に光秀の母皐月と妻操は謀叛人を子に持ち夫に持った身の因果を歎き、一子十次郎も許婚の初菊とつきぬ名残を惜しむ、そこに旅僧に身をやつした久吉（秀吉）は一宿を求めて様子を窺う。光秀は棚の下からふすま越しに之を刺す。あっと玉ぎる女の悲鳴は久吉ならぬ母の声。

絵本大功記十段目

＊＊＊

「絵本大功記」は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒らの合作によるもので、十三段から成る浄瑠璃作品である。それは読本「絵本太閤記」から明智光秀の物語を脚色したもので、寛政十一年に豊竹座で初演されとくに太十と呼ばれる十段目が有名である。近松門左衛門の墓は、尼崎市久々地の広済寺にあり芸人達の参詣が絶えない。隣接する近松公園はかなり広く、市民の憩いの場になっている。公園内に門左衛門の銅像や資料館がある。

広済寺山門

近松門左衛門墓

＊＊＊

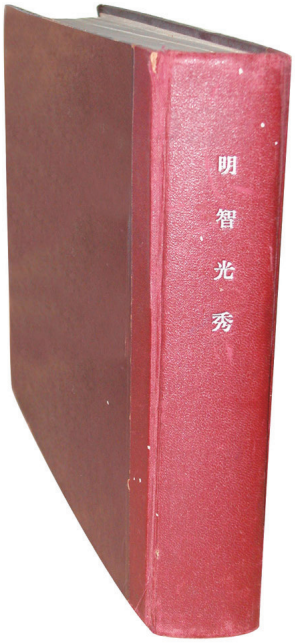
当時、尼崎に住んでいた私はなぜここと光秀とが結びついたのか、主殺しのほかに本当に母殺しの事実があるのかどうかを知りたく思っていた。大学に入って私はたまたまデカンショ節で知られる丹波篠山に下宿することになった。下宿の老婆

がまず案内してくれたのは篠山城址だったが、桜花爛漫の天守閣跡で老婆は東の方の連山を指さしていった。〝あのむこうに見える山は高城山というて、その昔、光秀のお母さんが殺されなはったところ〟。老婆はただ何気なくお国自慢をしたつもりだったろうが、そのとき、私は何の変哲もないこの山の頂に、悄然と立つ光秀の幻を見たような気がした。この山は浅芽山ともいい、光秀が攻略し波多野秀治を亡ぼしたところであるという。

母殺しの場が丹波からはるか彼方の尼崎の地に移ったのは、芝居の作者達が攝津出身の近松一派だからということが分かった。この話は創作として頷けるが、光秀には随分罪な筋書きである。勧善懲悪の面白さが人々に知られる反面、英知をもつ武将の真意は、まったく忘れ果てられてしまっている。

＊　＊　＊

主殺しといえば光秀、母殺しといえば光秀である。大学生活の数年間、私は各地の図書館を訪れ、落穂を拾い集めるように光秀に関する書物、史料、史蹟、伝説、伝承などを尋ねまわった。コピー機のなかった時代で、文章を手書きで書き写す作業が続いた。要した年月は資料の収集から草稿を書き終えるまで、昭和二十八年一月から三十四年七月の六年間余。それらは数百枚の板原稿用紙にまとめられ、臙脂の表紙と明智光秀という銀文字という当時としては洒落た装丁で製本された。



その昔に脱稿した明智光秀私本

この自作本はある時期、手許を離れた。ある出版社から「有名な歴史小説家が見たいといっている」との連絡があってそうなったのだが、その後、この作家の連載作品を読んでいるとここにしか記されていない地方の伝承が、物語の筋となって出てくる。〝返して欲しい〟とお願いしたがまったく反応がなく、立腹した友人が彼の許に出向き、直談判して持ち帰ってくれた。そのとき、迷った愛犬が帰ってきたような気になり、幾度もその表紙をなでたことを思い出す。

しかし、払った努力とは裏腹に、その後の四十数年の間、それは戸棚の奥に放置されたままであった。

＊　＊　＊

その後も私の収集癖は続いていた。明智光秀の四文字が目に入ると、何とはなく関連のある記事や書籍、資料などを片っ端から

集めて、箱の中に投げ込む性癖である。これは貫った骨を土の中に埋めておくワン公のそれに似ている。

そのころ、自分のライフワーク、「肩―その機能と臨床」（第三版、医学書院、二〇〇一年刊）の出版が終わり、さらに積年の念願であった英訳文「The Shoulder」が米国のワールド・サイエンティフィック社から発刊され、思いもかけない英国医学会の優秀図書賞というオマケまでいただいた。

やっと寛いだ私は、ふと思い立って昔の原稿を引っぱり出し、箱のなかで乱雑に重なり合った資料の整理を始めた。臙脂の本はかなり埃をかぶっていたが、布でそれを拭き取ると、当時の懐かしい記憶が今あったかのように甦ってきた。膨大な資料も年代順、事項別、土地別などに分類してみると、以前の記述の空隙を充分埋めるに足るものとなった。折々に撮影した、明智ゆかりの地の風景や由緒ある社寺・堂塔・墓石の写真も揃っている。

＊　＊　＊

「明智光秀と旅」（平成一七年刊）が出版されてから十年近くが経った。第三版の序文で〝もう改訂は望むべくもない〟と書いた「肩―その機能と臨床」（第四版）は、平成二十四年にさらに分厚くなって発刊された。これらはインターネットのせいもあって、多くの人に読んでいただいている。前書の在庫が少なくなり「書き直し」を思案しているとき、上田聡子氏の「松花堂昭乗出自孝」という一冊の本に巡り会った。―本光国師日記をひも解く―という副題のついた上品な装丁の書物である。この書は表題どおり昭乗の出自を調べたものだが、多くの登場人物が交錯してややこしく、一度の通読ではなかなか理解できなかった。しかし幾度も読み返してみると、今まで知らなかった数々の驚きの事実が考証されていた。昭乗が将軍足利義昭と明智光秀の娘との間に生まれたということや、津田信澄に嫁して坂本落城で亡くなったはずの彼女が生き延びて、国師として輿安法印や林羅山らとともに徳川幕府の古書印行に貢献したことなどが記されている。さらに彼女の葬儀に大御所徳川家康が参列したことが紹介されている。読むほどに精魂を籠めた筆者の熱情がひしひしと伝わってくる。喝を入れられたような気がして、目覚めた私は松花堂昭乗が足跡を残した石清水八幡宮、瀧本坊跡、松花堂跡、里の泰勝寺などを訪ねてみた。

人物の相関をより詳しく知るために諸系図をまとめ、その流れを明確にするための年表を作成することで、本書の作業は始まった。

＊　＊　＊

歴史は面白い。とくに戦国時代のそれが興味深い。そこには平穏な世にはみられぬ人間の夢と激しい野望が渦巻いている。歴史を読む面白さは、それらがどのように実り、また果されることなく終わったかというところにある。権謀を玩ぶ公卿達にも、戦い

に明け暮れる武将達にも、無名の雑兵らにもそれぞれ人生があった。彼らの喜怒哀楽は予期せぬ病やあるいは謀略のもとに斃れ消滅する。そしてなお面白いのは、そこに人がどうすることもできない何かの力が働いたという不可思議さであろう。

戦国の歴史は面白いが、一方では空しく悲しい物語である。人の生き方を尋ねるために、私は歴史上の人物に自分を投影しようと思って明智光秀を選んでみた。なぜかと聞かれても理由は見当たらない。ただ強いてあげれば、義憤に自分を抑えられなかった人物に、共感を覚えたからかもしれない。なにしろ長い間、「叛逆」を嫌う国家体制のなかで格好の標的となり、世間から三日天下と嘲笑され不当な評価を受けてきた人物だから、同じ事柄についても諸説がありいずれが正しいのか断じ難い。なお悪いことに、私は史書や伝承の良悪を峻別する知識も能力も持ち合わせていない。しかし、本能寺の変後に正親町天皇が京の町の安堵を願って光秀に勅命を出していたことや、公家や武将だけでなく多くの民が圧政の終焉に小躍りして歓喜の声をあげたとの記述を知り、尋ねれば尋ねるほど、光秀という人物自体が分からなくなってしまっていたのである。

最近、本能寺の変の真相を暴くという書をよくみかけるが、足で尋ねて目で眺め、そこで光秀に想いを馳せ、共感するものがないのが残念でならない。食堂前のガラスケースの中の、食べられないものを眺めて唾が出ないのと同じである。

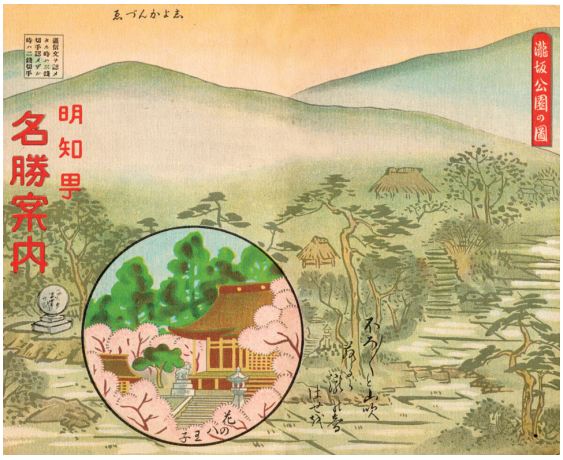
＊　＊　＊

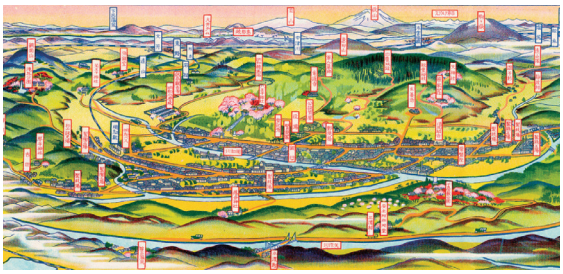
そこで、今まで大切に使っていた古いカバンに、新しく得た資料を加え、写真・イラストを添えて今一度、明智光秀公を訪ねてみた。それがこの本書である。前回のものの表題から「旅」の文字をとったわけは、それが終わりのない旅と知ったからである。ときの為政者に抹殺された多くの事柄が、未公開古文書の解読で周知される日のくることを期待している。

美濃

1. 千畳敷・柿本人麻呂祠（恵那市明智町）

二十数年前、光秀の出生地と伝承されている明智町を訪れた。JR恵那駅で乗り換えて明知鉄道に乗るよう案内されたが、時間がないのでJR瑞浪駅からタクシーで明智に向かった。土地に不案内の運転手さんはまず町役場観光課に入り「明智町観光マップ」を入手してくれたが、それは町おこしの「大正村」の宣伝に頁が費やされたもので、その昔に入手した光秀生誕の地を誇る切手3銭の時代の「明知町名勝案内」とはまったく趣が違っていた。また、明知の町名も明智に変わっている。本当に光秀の地だろうか少し不安がよぎったが、とにかく案内書に従って光秀ゆかりの地を廻ってみることにした。




明知町鳥瞰図

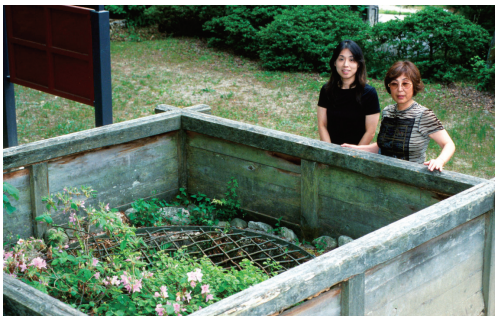
まず千畳敷（多羅砦ともいう）に向かった。町の南方にある小丘落合砦の跡が千畳敷公園である。明智城が宝治元年に築城された後、串原経景が城の西南にあたるこの小山に砦を構えここを支城としたという。たしかに明智町の南方に串原村の地名もある。

案内書には「山下に屋敷ありて子孫永く住すという。山上百歩余の平地あり、ここが明智城の物見櫓としての陣屋趾で、俗に千畳敷と呼ばれる」とある。公園内に大きい古井戸があった。口碑に「光秀産湯の井戸」といわれているものである。井戸は径五尺ほどの小石で築き上げられ、木枠で囲われている。頑丈な鉄網で覆われた内部を覗くと、羊歯が生い茂っていて暗く深さは分からない。光秀はこの城砦で生まれたとの伝承があるが、文献にある「多羅」の地名が、光秀生誕説の根拠になったのだろうか。

＊　＊　＊

駅の近くに八王子神社というのがあり、本殿側に口碑に伝わる光秀手植えの楓（松）と、文武を志して光秀が建てた柿本人麻呂祠がある。光秀自らが祭主となり、社殿には桔梗の紋所を刻んで

千畳敷公園


光秀産湯の井戸（家族と一緒に）

八王子神社にある柿本人麻呂祠

光秀手植えの楓

祀ったと伝承されている。歌を好んだ光秀が人麿の祠を祭ったというのはよくできた話だが、手植えの楓とか産湯の井戸というのはどこにでもある代物でいただけない。この神社は郷社で平安時代の天歴三年に勧進され、天之忍穂耳命ほか七神が祭神という由緒あるものである。元亀三年、明智城陥落のとき焼失したが、その後代々の城主が造営修補し、現在の社宇は延宝四年城主遠山景次の造営に係ると記録されている。

柿本人麻呂は天武、持統両天皇に仕えた宮廷歌人。万葉集を代表する人物で、天武、持統、文武の三代に活躍した下級官吏、天智朝に出仕していたとする説もある。雄大荘重な長歌の形式を完成する一方、短歌においても叙情詩人として高い成熟度を示し万葉歌人の第一人者とされる。その出自経歴に謎が多く、難解な和歌が古代朝鮮語あるいはハングルで解読できることから、朝鮮からの渡来人とも考えられている。天武朝に柿本人麻呂歌集を筆録し後の歌風の基礎を築いた。石見の国で没したとされていたが大和近辺とも考えられ、奈良遷都以前に死去したとの説もある。古今集の序に歌聖と称されその以後も歌人達によって崇められている。

巨木に囲まれた静寂な雰囲気の人丸塚というのが、明石城址（現兵庫県明石公園）の巽櫓と未櫓の間にある。はじめ僧空海がここに楊柳寺を建立、仁和のころに住職覚証が夢のお告げで柿本人麻呂をここに祀ったというのが始まりである。後に柿本神社が建て

られたが、それは明石城築城に際して明石市人丸町に遷され、現在の人丸山柿本神社となって社殿も改築されている。島根県益田市にも柿本神社がある。和銅年間、人麻呂が没したとされる鴨島に社殿が建立され、延宝九年に現在地に移転したと伝えられている。

明石公園にある人丸塚

が生い茂って周辺の眺望を遮り見るべきものは何もない。案内書にある「城址へ道幾曲り草紅葉」のとおりである。

ここに光秀がいたという記録はない。明智町には他に城趾がないことから、光秀と白鷹城はまったく関係がないのかもしれない。当時の美濃の実力者は土岐と遠山の二氏、明智の東北、岩村と明智の真北、岩村の西に遠山という所があるが、遠山氏はこの遠山庄からの出自である。白鷹城が遠山氏の築城に依るとあることから、叔父光安がここに住んでいたという話はでたらめである。しかし、光秀がこの遠山明智氏の地で父と早く死別し、ここで良母に育まれたことは本当かもしれない。

＊　＊　＊

白鷹城から八王子神社に戻る道中に、大明山龍護寺という静かな佇まいの臨済宗妙心寺派の名刹があった。この寺は慶長元年、時の城主遠山利景が、浄地をもとめて建立した遠山家の菩提寺である。寺の本堂横に遠山家累代の墓所があり、山門入口右手に「光秀公出生地」という案内の石碑、その奥の樹林のなか一段高い石組みの上に光秀の供養塔「光厳院殿涼目秀天大居士神儀」が立っている。この石墓については通説どおり、光秀の痛切な思いで斜めにひび割れが入っている。また、この寺には九条衣の伝承がある。それは「その昔、落武者が訪れ、無念の光秀の直垂を持参し、永代供養を乞うて去った」というもので、九条衣と称される袈裟

2. 明智城址・龍護寺・於牧の墓所・天神神社（恵那市明智町）

町の東方八百米の山上に明智城址があるが、これは鉄砲のなかった足利時代の築城法による山城である。近古時代に美濃の豪族、加藤景重（遠山明智氏）が元治元年に築いた城で、俗に白鷹城と呼ばれている。元亀三年十二月（天正二年春とも）甲斐武田氏の将秋山晴近の来襲に遭い、城主遠山景行は防戦したが落城、後にその子利景がこれを奪還したが自立できず退散して徳川氏を頼ったという。天険の地形を利用し土盛砦、畝堀などのある典型的な山城。最近人が通った形跡がなくあまりにも急な山道なので少し怯んだが、娘に「二度とくる機会はないよ」と激励され一気に登った。靴はドロドロ、ひどく息切れ。山頂の城跡には、草木

龍護寺にある光秀供養塔

龍護寺

の四隅にこの直垂の布が縫い込まれ、寺宝として伝えられているとのこと。拝観をお願いしたかったが、あいにくご住職もご家族も不在の様子、光秀公の供養塔にお参りして次に向かった。

＊＊＊

寛保三年に建てられた光秀の母於牧の方の墓所は、町の東南、白鷹城と相対する御山砦の麓にあり、樹齢数百年の高野槇の巨樹（神木）の傍らに祀られている。しかし、世評をはばかってかその名は伏せられ、墓碑にはただ南無阿弥陀仏とだけ刻まれているという。その傍らにはあたかも於牧の方を守るかのよう。に数基の小さな墓石群が並び、訪れる人の心を癒している。当地では於牧の方の供養のため、近在の人々の手による甘酒祭りが閏年ごとに行われているという。

神木下の於牧の方の墓、傍らに数基の小墓石群

＊＊＊

最後に明智町万ヶ洞にある天神社を訪れた。それは山の麓、谷間にある狭い畑地の畦道から通じる丘の上にあったが、案内標識は畑の横の小道標だけ。里人に聞いても所在が分からずようやく辿り着いた。そのせいかタクシーを降りてからかなりの道のりがあるように思えた。万ヶ洞天神神社は京都北野の天満宮からの分祀と伝えられる。神社の真横に幾度か改補修を重ねたらしい茅葺屋根の建物があった。ここが光秀幼少のころに京都嵯峨天龍寺の雲水勝恵という学僧がきて精進したという学問所跡である。不思

天神神社

光秀が精進した学問所

議なことに古い明知町名勝案内には天神社が紹介されているが、学問所跡と於牧の方の墓所の案内は記載されていない。郷土の人達によって後に比定されたものであろうか。

3．明智城址・天龍寺（可児市瀬田町）

明智町から土岐市を経て、西北に道をとると可児市瀬田がある。ここは古くは土岐明智の本拠、明知庄と呼ばれ光秀の出生地といわれているところである。地図を頼りに明智城址の長山（おさやま）に向けタクシーをとばす。明知庄の東西に延る丘陵にそって新興住宅地があり、坂道を迂回して上がるとようやく城址の入口に辿りついた。犬の散歩をしていた女性に出会って挨拶すると、笑って「何もありませんよ」という。標高百七十五米の中世の平城とあったが、城址を示す石碑、城址記を記した案内板、曲輪の配置図、本丸・二の丸跡の石柱などが、あまり広くない台地に点在していて、城址というより住宅地の公園になってしまっている。城址記には「康永元年明智次郎長山下野守頼兼により開城、弘治二年九月に斎藤義龍に攻略され落城」とある。

明智城址碑

明智城本丸跡